

第2回 「弔いのかたち」

2010・8・1

～ 現世からの旅立ち ～

林 田 利 之

1. 弔いの始まり

●最古の弔い

埋葬とは、文字通りに死者を土の中や、地下の施設に納めることですが、その意味合いとしては、1. 死者に敬意を表し、死後の世界での再生や復活を願う、2. 死者を偲ぶための施設として、埋葬場所が分かるように墓とする、3. 生活する場の周辺に遺体があると見栄えが悪いので隠す、4. 遺体の放置が衛生上よくないから、5. 遺体の復活を恐れて、宗教的にそれを阻止する、などと説明されています。

最も古い埋葬の例と考えられているのは、今から20万年前に地上に出現したネアンデルタール人が行ったものと考えられています。発見されるネアンデルタール人の化石は、事故や遭難のため埋葬される事なく遺棄されたと思われるものも少なくありませんが、洞窟内など特定の場所から何体もの骨格化石が副葬品と共に発見される場合も多く、彼らが死者を葬っていた証拠とされています。

ネアンデルタール人は2万数千年前に絶滅した人類の一種ですが、彼らが10万年前に仲間を埋葬したのであろうと考えられる墓が、1950年代にイラクのシャニダール洞窟(図1)で発見されました。また、この化石人骨周辺の土を分析したところ、タチアオイ(図2)という植物の花粉が大量に見つかり、埋葬時に自然に混入したものではなく、死者を葬るに際して、仲間が献花したものと考えられています。

ネアンデルタール人が献花を行っていたのかは定かではありませんが、人は原始の時代から既に自分たちの仲間を葬るという行為を行い、弔いの始まりと考えられる行動を起こしていたと考えられています。



図1 ネアンデルタール人の埋葬(復元ジオラマ)



図2 タチアオイの花

2. 日本の弔いの歴史

●旧石器・縄文時代の弔い

日本最古の墓と考えられるものは、北海道にある旧石器時代の遺跡から発見されています。その後に続く縄文時代になると明らかに墓と考えられる穴(土坑墓)というものが発見されるようになります。印旛地域においても多くの墓(遺体)が発見されており、千葉県内だけでも千体程度の縄文人骨が発見されていると思われます。

縄文時代の墓地は集落内や貝塚などに設けられるのは一般的で、死者は土坑墓や土器棺墓、石棺墓などと呼ばれる墓に埋葬されます。また火葬や再葬が行われている例も確認されています。埋葬する時の遺体の形は手足を折り曲げる屈葬(図3)と手足を伸ばした伸展葬(図4)の二つの形があります。さらに住居の内外どちらかの地面に穴を掘り、土器を埋めてその中に遺体を納める埋壺は、乳幼児の墓(または胎衣壺)である可能性も考えられています。



図3 屈葬の例



図4 伸展葬の例

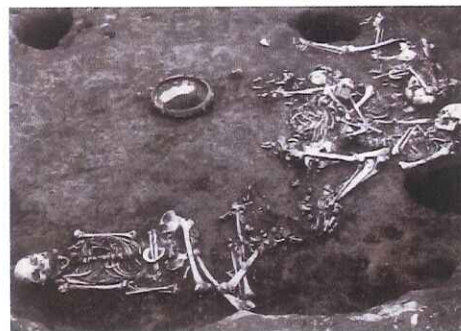


図5 住居内から発見された人骨の例



図6 人骨が見つからなかった例